

仮設住宅の生活は復興へのバネ ～新潟県中越からのメッセージ～

(社) 中越防災安全推進機構 地域防災力センター
センター長 諸 橋 和 行

◆ はじめに

現在、縁があって、陸前高田市オートキャンプ場モビリアに我々のチームが常駐し、地元のモビリア運営スタッフとともに、復興の歩みを模索しながら活動を行っています。



とちお同住会（新潟県長岡市栃尾地域）の方々がモビリアに来て、仮設生活の経験を語り交流した。

7 年前の平成 16 年 10 月 23 日、新潟県中越地域は最大震度 7 を記録する大地震に見舞われました。中越地震（死者 68 名、負傷者 4,805 名）です。

我々は中越地震の被災地において、被災者に寄り添い、様々な支援者とネットワークを形成し、行政との協働の場をつくりながら復興のプロセスを歩んできました。その経験を活かし我々ならではの被災地支援を行うことが社会的使命であり、中越地震の時に全国から多くの支援をいただいた恩

返しでもあります。

我々の特質は、中越地震を経験したことにより、今後の展開において 1 歩先もしくは 2 歩先がイメージできることではないかと思っています。もちろん災害はすべて違う顔を持っているので、中越地震と東日本大震災とは異なる要素も多数ありますが、復興に向う歩みにおいては共通するところが多分にあると考えています。

◆ 仮設住宅における生活の意味

さて、仮設住宅での生活（以下、仮設生活）にはどんな意味があるのでしょうか。仮設住宅とは文字通り仮の居所です。いつかは離れる住まいであり、むしろ仮設住宅から離れた後こそが真のスタートといえます。

ではこのスタートする時の推進力はどこからくるのでしょうか。これこそ仮設生活の生き方そのものだと思います。仮設生活とは復興に向けた推進力づくりであり、これが復興のバネとなります。ただ漠

然と無気力に過ごしては復興のバネが伸びきってしまうはず。日々の生活を少しでも良いものにしようとして工夫し前向きに過ごす、その積み重ねが強いバネを作り出します。そしておそらく孤軍奮闘するよりも、ともに歩む仲間がいたほうがきっといいはずです。



7 月 23 日開催（モビリアセンターハウス）の中越地震の仮設経験者と語る会の様子

仮設生活を前向きに過ごそう！

人生は連続しています。仮設生活を我慢して過ごせば、おそらく仮設後も我慢の生活が待っています。逆に楽しみを持って前向きに仮設生活を過ごせたならば、仮設後も前向きで楽しい生活が待っているはずです。

仮設住宅における支援とは、被災者それぞれにおける復興のバネづくりのお手伝いであり、より強いバネとなるよう様々な支援者が協力して知恵を出し合って進めていくものです。したがって、我々は、「寄り添う支援」⇒「見守る支援」⇒「役割支援」⇒「生きがい支援」⇒「生業（なりわい）支援」といった支援のステップアップを漠然とイメージしながら、日々模索・試行しているところです。

◆ 仮設住宅のコミュニティづくりに一石



現在の状況把握と今後の方針検討
ミーティング（終礼）

仮設住宅ではコミュニティづくりが重要だといえます。異論はありません。しかし、「それはなぜ？」という問いにきちんと答えることができるでしょうか？仮設住宅におけるコミュニティづくりは、あくまでも「手段」であり、「目的」ではありません。手段が目的化するとおかしいことになります。

私はこう考えています。仮設生活の支援において最優先に求められることは「不幸な死者を出さないこと」。不幸な死者とは、孤独死や自殺、社会的弱者の災害死など。次に求められることは「自力での日常生活が困

難な人の状況を改善すること」。なぜならば日常生活に支障をきたすということは、不幸な死に直結するからです。このため、保健師や看護師、地域外からの専門ボランティア等が定期的に仮設住宅を訪問していますが、それだけではどうしても不十分です。

例えば今でも余震が続いていますが、夜中に大きな地震があった時、自力で避難できない人を誰が助けることができますか。これは同じ仮設住宅に住む近隣住民にほかなりません。逆に、近隣の仮設住宅の住人が孤独死したらどんな気分になりますか。その場所であと数年は住まなければいけないかもしれないのに。そう、他人事ではないのです。だから仮設住宅ではコミュニティづくりが重要なのです。仮設住宅における安心安全を確保するとう「目的」のために、コミュニティづくりという「手段」が最良だと思うからです。

しかし、あくまでも「手段」である以上、絶対視は禁物です。状況によっては、コミュニティづくりが困難な場合もあるでしょう。その場合はセカンドベストな方法を探す。要はコミュニティづくりが大切なのではなく、安心安全の確保が大事なのであって、それを実現するあめの手段も一つでないはずであり、そこは支援者が知恵を絞る。さらにはその過程に仮設住宅の住人も自分事として関わるのが強く望まれます。

簡単メニュー

「チーズ豚丼」

男の料理

■材料（2人分）

ごはん	300 g
豚こま切れ肉	200 g
チーズ	50 g
醤油	大さじ 3
みりん	大さじ 2
酒	大さじ 2
砂糖	大さじ 2



■作り方

- 1、フライパンに油を熱し、豚肉を炒める。
- 2、豚肉に焼き色がついたら、一旦火を止める。あわせた醤油・みりん・酒・砂糖を加えて再び火にかけ、少々煮込む。
- 3、味が全体に馴染んだら火を止める。
- 4、器にアツアツごはんを盛り、3をのせる。その上にチーズをのせて完成です。

甘辛いタレでごはんがすすむ、男の簡単豚丼！ たっぷりチーズをからめてどうぞ！

※「<http://www.shokurepe.com/>」から
毎月連載します 楽しみに

◆ おわりに

「復興とは」。中越でこれまで幾度となく議論されてきました。明確な結論は出ていませんが、「復興に向おうとする人々の前向きな意識こそが復興の本質」という言葉が自分には一番しっくりきます。復興の先にはそれぞれの成長が待っています。「震災のせいで」から「震災のおかげで」と言えるようになるための長い道のりが復興のプロセスなのでしょう。

我々は、陸前高田オートキャンプ場モビリアで「復興一番乗り」を掲げ、日々悩みながらも少しずつ前に進んでいます。その様子はすべてホームページ (<http://mobilia-project.seesaa.net/>) 掲載しています。ここでの復興の歩みが、被災地全体の復興の進捗を多少なりとも底上げすることにつながるようこれからも挑戦していきます。

※ 投稿いただいた諸橋様にはご多忙中のところ、原稿を快くお引き受け頂きありがとうございました。

私も一言

最初の情報紙への投稿、大船渡市の平山睦子さん、陸前高田市の佐々木栄さんに無理を言って、ご協力を頂きました。次号へは多くの皆様の投稿をお待ちしています。

大船渡市大船渡町

大中仮設のボランティア 平山睦子さん



大船渡中学校グラウンドに建設「永沢仮設団地」内で「もやい」による子どもたちとフーセン遊び

震災前は大船渡町の加茂神社交差点そばに住んでいました。津波の当日、近所の人たちと加茂神社で毛布に足を入れ温め合い励まし合って夜明けを待ちました。

普段は義母、夫、長男の4人暮らしでしたが、たまたま東京より帰省していた次女と5人暮らし、いえその日から名前も顔も知らない、500名の皆さんとの避難生活が始まりました。5月15日に

大船渡中学校校庭の仮設住宅へ居住し、2ヶ月半経ちましたが、家の中足の踏み場が無く、布団を敷くにも毎晩テーブル、椅子等の大移動です。大中仮設は137世帯、そのうち大中避難所から約30世帯が移動しています。大中避難所は震災当初より、とても自治会組織が機能されていて、私たち避難者は安心して生活が続けることが出来ました。自治会長の平山仁さんはじめ沢山のスタッフの皆様に感謝申し上げます。その時のチームワークでこの大中仮設のボランティア活動をしています。この仮設にまだ自治会が出来ていないので、外来者の為の仮設住民の案内、ボランティア等の受け入れや物資の窓口になっています。大中仮設に御用の方はどうぞ声をかけて下さい。 大中仮設「永沢仮設団地」15-2

陸前高田市気仙町 佐々木栄さん

近くの畑で柿の木を切っていた時大地震、津波を予想し、少し離れた義姉を迎えに行った。義姉(84才・逝った)は気仙小グラウンドに避難していたが、もっと高台に逃げようと言うと「町内会の人と一緒にいる」と私の誘いを断った。妻はどうしようかと我が家に戻ったところ、すでに高台へ避難していた。私は近所の人たちへ必死で避難を呼びかけたが、だれ一人「此处まで」と言って応じなかった。私は「アベ～・ニグロ～」と叫びながら、決めていた細い山道を息を切らして駆け上がった。私を追うように黒く渦をまきながら津波が迫ってきた。辺りのばあさんの姿は無かった。

高田第一中仮設へ入居

高田一中玄関に氷の彫刻(鶯)7月25日



全国初の木造仮設住宅

住田町に建設した応急仮設住宅は、全国初の木造一戸建として注目を受けている。3 団地（下有住中上 63 戸、世田米火石 13 戸、世田米本町 17 戸）に 93 世帯が入居している。被災者の出身地はどこだろうと聞く方があるので、役場から聞いてみた。大船渡市 11 世帯、陸前高田市 79 世帯、大槌町 3 世帯で、85%が陸前高田市出身世帯でした。



住田町「火石団地」

講演会 喪失体験と悲嘆ケア～

講師：高木慶子先生（生と死を考える全国協議会会長）

と き：23 年 8 月 11 日 午前 10 時～12 時 00 分／ところ：気仙教育会館（盛町字東町 14-2）

主 催：おおふなと男女共同参画うみねこの会 後援：大船渡市、大船渡教育委員会、NPO 夢ネット大船渡

三陸 海の盆 送り火 8月16日 午後7時 みなさん来てください

- 日時
平成 23 年 8 月 16 日 午後 7 時～8 時
- 場所
大船渡市末崎町大田 門の浜海岸
- 内容
送り火に点火・夢灯り
黙祷
赤沢剣舞／詩吟／念仏
線香花火

末崎町のある地区では、昔から海に仏様を送る習慣があった。仏様は海から来て海へ帰ると思われていたようである。仏様送りの日は、盆棚の供物や花を持って浜に下がり、船に寄せ、「彼岸にはまだ来さっせんや」と言いながら送ったものであった。

多数の隣人や知人の命を巨大津波に奪われたいま、鎮魂と復興の誓いを新たに、被災の記憶を風化させない決意とコミュニティの再生を目指して、送り火を復活させたいと願う。送り火の復活は、人間復活でもある。

主催：三陸海の盆送り火開催実行委員会、共催：岩手県沿岸広域振興局、全国ふるさと大使連絡会議、NPO 法人夢ネット大船渡、末崎地区公民館、後援：大船渡市、東海新報社

情報紙
が
お
届
け
し
ま
す

被災者支援情報紙「みらい」発行のご挨拶

NPO 法人夢ネット大船渡 理事長 岩城恭治

8 月より毎月、ジャパン・プラットフォームの助成金を受けて、被災者から待たれる情報紙「みらい」発行に努力します。これまで発行してきました市民活動情報紙「みらい」の通し番号、第 25 号として発行しました。一方的な情報紙ではなく、被災者の皆さんにも参加して頂く情報紙としたいので、多くの皆様のご協力・ご投稿をお待ちしています。

投稿先：大船渡市大船渡町字地ノ森 40-8

夢ネット大船渡 Tel22-7028/fax 22-7029

